

主家賛美と憂愁叙述

—『紫式部日記』行事記録の方法—

原 田 敦 子

一、「紫式部日記」冒頭部の構図

【紫式部日記】^①冒頭部は、中宮彰子のお産と親王誕生の祝儀の舞台となる土御門殿の秋色の美景に筆を起こした後、室内に眼を転じて、妊娠九カ月の身重の身の大儀さをさりげなく隠して平静を装っている中宮の立派さに、憂き世の慰めにはこのようなご主人を尋ねてお仕えるべきであったと、日頃のもの憂い気分とはうつつて変わって、忘我の境地にいる我が身の矛盾を鋭く凝視するところから、本題のお産と祝儀の記録に入つてゆく。

憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかり
けれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らる
るも、かつはあやし。^②

ここで主家賛美、主人賛美から「かつはあやし」と切り返す筆は、筆者内心の矛盾をえぐり出すとともに、賛美の対象から一瞬身を引

いた筆者の対象との心理的距離感をも表していると言えるであらう。こうした心理的距離感とは、この「日記」中の栄華の記録に相接してしばしば現れる憂愁叙述にも共通するものであるが、主人道長から要請された「主家栄華の記録」^③としての始発を有する「日記」が、その冒頭部から抱え込む、と言うよりも顕示するこの反賛美とも言える姿勢は、一体何を意味し、記録する姿勢と如何にかかわるのであろうか。

平素の憂き世の意識もどこへやら、忘我の境地に浸ろうとする自身を危うく立て直し、そうした自己に「かつはあやし」と冷徹な目を注ぎながら、日常的な時間の経過と日常的な事柄の継起のなかでは、対象との間の心理的距離感もやがて薄れてゆかざるをえないのか、自身をとりまく四圍の華麗な世界に馴化し、巻き込まれてゆくかのように、式部は中宮お産前の土御門殿の描写に筆を走らせた。そこには、「栄華の記録」の作者としての紫式部の姿がある。

まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まゐりなばや」「女官はいままでさぶらはじ」「藏人、まゐれ」など、いひしろふほどに、後夜の鉦うちおどろかして、五壇の御修法の時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしく、たふとし。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧をひきあて、御加持まゐりたまふ足音、渡殿の橋の、とどろとどろと踏み鳴らさるるさへぞ、ことごとこのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の御殿、浄土寺の僧都は文殿などに、うちつれたる淨衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間を分けてかへり入るほども、はるかに見やらるる心地して、あはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。

中宮お産前の土御門殿の高揚した霧囲気が女房たちの会話から生き生きと浮かび上がってくる。土御門殿を地鳴りのように包む僧たちの読経の声もただならざる尊さであるが、次に記される加持に向かう高僧たちの姿は、目前に迫つたお産が国家的一大事であることを如実に物語つて、緊張感をいやが上にも盛り上げる。中宮お産に奉仕する僧たちの姿は随処で描かれるが、「観音院の僧正」「法住寺の座主」「浄土寺の僧都」と、実名でたたくみかけるように記されるこの冒頭部の叙述は、異様な吸引力で注意をひきつけずにはおかない。

この後には、道長、頼通親子の風趣ある姿・態度と、播磨の守の甚の負態という行事によつて、主家の人々の素晴らしさと土御門殿の美的生活を叙し、今まさに天下の耳目を集める中宮お産の舞台装置を整えたうえて、初めて日付をして、上達部・殿上人の奉仕と里居の女房たちの参集を記し、いよいよ待機の態勢に入った邸内のあわたしさを描き上げていく。

八月二十余日のほどよりは、上達部、殿上人ども、さるべきは、みな宿直がちにて、橋の上、対の簀子などに、みなうたた寝をしつつ、はかなうあそび明かす。(中略)

年ごろ里居したる人々の、中絶えを思ひおこしつつ、まゐりつどふけはひ、さわがしうて、そのころはしめやかなることなし。多く時系列によつて事実を列挙していく記録的日記とは異なり、見事に引き締まつた、それでいて躍動感溢れる叙述の方法は、まさに紫式部の独壇場で、『源氏物語』作者の手になる『紫式部日記』の存在価値はここにあつたと、誰しも納得せざるをえないところであらう。だが、私はここまで読み進むとき、まことに唐突ではあるが柿本人麻呂の「吉野讃歌」を思い出さずにはいられない。

二、宮廷讃歌の流れ

吉野宮に幸せる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし 我が大君の 聞こし食す 天の下に 国はしも

さにはあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の
花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの
大官人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る この川の
絶ゆることなく この山の いや高しらす みなそそく 滝の
みやこは 見れど飽かぬかも (万葉集卷一・三二六)

反歌

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またか
へり見む (同・三七)

やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 激
つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば
たたなはる 青垣山 やまつみの 奉る御調と 春へには 花
かざし持ち 秋立ては 黄葉かざせりへに云ふ、「もみち葉
かざし」^① 行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上
つ瀬に 鶴川を立ち 下つ瀬に 小網刺し渡す 山川も 依り
て仕ふる 神の御代かも (同・三八)

反歌

山川も 依りて仕ふる 神ながら 激つ河内に 船出せずかも
(同・三九)

三六番歌では、吉野宮の「宮讃め」と供奉する大官人の天皇への
奉仕を生き生きと描き、三八番歌では山川の神の天皇への奉仕を述

べて、あわせて帝徳の広大さ、勢威の高さをうたい上げる。宮廷讃
歌の典型ともいえるこれらの要素は、「紫式部日記」冒頭部の主家
賛美の構図にも共通するものであった。吉野離宮讃美に通う土御門
殿秋色の美景の描写、上達部・殿上人と女房たちの奉仕、そして、
山川の神々にかわつては、加持の僧たちの姿がある。神ならぬ仏ま
でもが、中宮の安産とそれによつてもたらされる道長家の繁栄に奉
仕するとしても言わんばかりの描かれようである。身崎寿氏は、大官
人の奉仕のさまを描くことが讚美表現の基本的な類型のひとつだつ
たとする森朝男氏の指摘^②に対し、その大官人の行動が、

御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷き
ませば

という、天皇自身のものとしてえがかれる行動と呼応するかのよう
に、対比的に配置されていることに注目して、いわゆる「君臣和
楽」の構図が意図されているのではないかとされたが、^③「紫式部日
記」において、近侍の女房たちの「はかなき物語」を聞きながら身
重の身の大儀さを隠して平静を装う中宮彰子の姿や、庭の女郎花を
一枝折り取つて式部に差し出し、歌を詠ませようとする道長と、そ
れに答えて歌を詠む式部の姿に君臣和楽の景を見ることもできよう。
宮廷讃歌の型には、官人の奉仕とともに人民の奉仕をうたうもの
が多くあった。^④阿蘇瑞枝氏は、「藤原宮の役民が作る歌」を宮廷讃
歌としてとらえ、ここに一貫して流れているのは、「天皇の現神思

想とその現神天皇に人も天地も競って奉仕しているという王化思想」であると言われたが、藤原宮造営のためにいそしみ働く役民の姿は、

…… 石走る 近江の国の 衣手の 田上山の 真木さく

檜のつまでを もののふの 八十字治川に 玉藻なす 浮かべ

流せれ そを取ると 騒く御民も 家忘れ 身もたな知らず

鴨じもの 水に浮き居て …… (万葉集卷一・五〇)

とうたわれる。民衆が私事を顧みず、労苦を厭わずに労働に奉仕するさまを通して天皇が讃美されるという構図は、憂愁を抱えた女房や身分の低い下衆の男たちまでもが、皇子誕生と道長家の繁栄を寿いでいるという構図と、そっくり相似形をなすものではないか。この点で「紫式部日記」の中宮お産の記は、まさに宮廷讃歌の流れを汲むものと言えよう。作者や同僚女房の憂愁の叙述が栄華の賛美につながるの見解が生じる所以でもある。

【万葉集】「藤原宮の役民が作る歌」が、その発想や修辞の方法からして役民の作ではなく、宮廷歌人の作であったことは疑いをいれない。ただし、ここでうたわれる人民の労苦は、『紫式部日記』の場合と異なり、作者の内面とあいわたるものではなかった。主家栄華の記録の先蹤として挙げられる『枕草子』の日記的章段も、中宮定子や中関白家の人々、あるいは定子後宮文化へのあくことなき讃歎をうたいあげつつ、作者の憂愁を描くことはなかった。これに

対し、『日記』の紫式部の場合は、眼前の栄華の世界が華麗なものであればあるだけ、自身の中にしかと抱かれてある憂悶に固執し、幾度となくそこに回帰してゆく。労苦や憂愁は他ならぬ作者自身のものであり、主家栄華の記録をなすことが、栄華から疎外されつつ栄華の記録をなす自身の矛盾を顕在化し、平素から心底にわだかまる憂悶を意識の底から呼び起こさずにはおかなかった。このことは、柿本人麻呂以下の宮廷歌人と清少納言、紫式部それぞれの個人的資質にのみ帰されるべき問題ではなく、人麻呂にあつては前途にさまざまな困難が予想される持統朝の前途を最大限に祝福する讃歌を詠まねばならないという、「現実」からの要請があり、清少納言にあつては、中関白家の凋落と中宮定子の悲運が、清少納言の筆を全的な主家賛美一辺倒のものに規定し、主人と主家のもつとも光輝ある姿のみを描かせたという、事情があつた。

これに比して、中宮彰子の敦成親王出産によつて政権を磐石なものとした道長家には、将来に何ら不安材料はない。中宮に仕える一女房の憂愁の吐露が、道長家の栄華の光を翳らせるなどということとは全く考えられもしなかつたし、人生を深く思い染めた紫式部のような女房の存在を許容し、包含していることが、主人道長の度量であり、明るく機智に富んだ中関白家の文化とは異なる、道長家の文化の奥深さを物語るものでもあつた。してみれば、道長家の栄華の記録たる『紫式部日記』に一女房の憂愁叙述が存在すること自体、

道長家榮華の最大の証であつたとしてもできよう。

しばしば指摘されるように、式部は主家榮華の記録をなすにあつて、「枕草子」を強く意識し、対抗心を燃やさざるをえなかつた。ここに式部は、歌合日記以来の晴儀の記録の系譜の正統を継いで、記録性を強く志向しつゝ、一方で「万葉集」以来の宮廷讚歌の形式を踏み、大宮人や人民の奉仕に人民の労苦を寄り添わせると同じ体で、主家への奉仕と主家榮華の賛美に添えて、自己の憂愁を叙述するという方法を編み出し、「枕草子」とは明らかに別趣の、主家賛美の記録を達成したのである。ただこのことは、「日記」の憂愁叙述がただちに主家賛美のためにするものであることを意味しない。

主家賛美と憂愁叙述と——この両者の関係については、憂愁の叙述が見識ある女房としての謙退を示し、あるいは賛美の表現に奥行きを増して、主家慶祝の記をより高めるものなどとする論も存するが、やはりそれは逆であろう。たしかに憂愁叙述が「作品」としての「紫式部日記」に奥行きを与えていることは否めないし、憂愁叙述が主家賛美の記録の中に許容されてあることも事実である。ここで問題は、そうした叙述が紫式部に課せられたはずの「榮華の記録」をより一層高めるものとして、作者に意識されていたかということではなくてはならない。紫式部には、自身を主家の榮華の光の中に立たせない覚悟があり、自己の中に核として抱かれてある憂悶が、いかなるものによつても溶解するものではないとの醒めた認識

があつた。^①「日記」の叙述が常に外界の榮華から内心の憂悶に回歸するパターンを繰り返すことや、次節に述べる榮華からの疎外感によつても知られる如く、この場合は、影が光の輝きを引き立てるのではなく、光が影の深さを増すのである。紫式部は、むしろ、憂愁叙述が主家賛美の大義名分を決して冒すものではないとのひそやかな自信に支えられて、主家榮華の記録の中で自身の鬱憤を解き放つという企みをやつてのけたと言えるのではあるまいか。

三、対象との距離感

【紫式部日記】の中には、作者紫式部の孤愁や内面の憂悶のみならず、眼前の榮華の世界から疎外されていることに対する不満の口吻の如きものも記されている。

中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおほして、かたらはせたまふも、まことに心のうちは、思ひゐたることおほかり。

敦成親王誕生から一カ月も過ぎようという頃、初孫の尿にぬれながらその誕生を喜ぶ道長の好々爺ぶりを描いた後、式部の筆は突如として、長男頼通と中務宮具平親王の娘隆姫との結婚を切望していた道長に親王家といささかの縁ある者とみなされ、相談を持ちかけられて抱いた複雑な思いを、投げ出すように記しとどめる。人間藤原道長に寄せる共感を、政治家藤原道長の権力志向への不信によつ

て振り払おうとするかのような筆致である。

このことは、すぐ後の記事で、一条天皇の行幸を前に善美を尽くして磨き立てられる土御門殿を、「げに老も退ぞきぬべき心地する」と全的に賛美しながら、「なぞや」で反転し、「めでたきこと、おもしろきことを、見聞くにつけても」「そうした雰囲気の中に溶け込んでゆくことができず、頭をもたげてくる日頃の憂悶に深く苦しむ我が身を、水の上に浮く水鳥に思ひよそえ、低迷する思いを水鳥に収斂していくことと無縁ではない。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつづ
思えば、こうした自己反照は、冒頭部で、中宮彰子の心ざまの素晴らしさに平素の憂鬱な気分とはうってかわって、忘我の境地に浸ろうとするところから立ち返り、そうした自分を「あやし」と擬視する精神構造のありようと軌を一にするものであった。具平親王家にかかわるこの道長との一件は、「日記」中で幾度か繰り返される外的栄華の世界と内的憂悶との間の往還が、眼前の栄華からの疎外感に根ざすものであることを如実に物語っている。

この水鳥に託された憂愁は、同僚女房小少将の君と物思いの絶え間ないことを嘆き合せて交わした時雨の贈答に自然につながってゆく。

雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なららむ

(小少将の君)

ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞかわくまもなき

(紫式部)

この前には、

小少将の君の、文おこせたる返りごと書くに、時雨のさとかきくらはば、使ひもいそぐ。「また、空のけしきも、うちささわぎてなむ」とて、腰折れたることや書きまぜたりけむ。暗うなりにたるに、たち帰り、いたうかすめたる濃染紙に、

とあって、小少将の君から贈られた文に対する式部の返事に重ねて「雲間なく」の歌が贈られてきて、時雨の贈答が交わされたことが分かる。小少将の君は、彰子後宮の中で式部がもっとも親しくしていた友であるが、道長室倫子の姪という高い家格を誇る上臈女房であった。ここは、そのような小少将の君のほうから使いをよこして、憂き世の物思いに式部の慰藉を期待し、式部がそれに答える体になつているところに注目するべきで、道長家最高の栄誉と言うべき十月十六日一条天皇土御門殿行幸を叙す記事の直前に置かれた、こうした憂愁を含んだ記事が、絢爛たる一条天皇行幸絵巻の縁取りの役割を果たしていることに気づくべきであろう。この縁取りは行幸絵巻の中の暗部にも照応している。

御輿むかへたてまつる船楽、いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁の、さる身のほどながら、階よりのほりて、いと苦しげにうつぶしふせる、なにのことごととなる、高きまじらひ

も、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

あたらしき宮の御よろこびに、氏の上達部ひきつれて拝したてまつりたまふ。藤原ながら門分かれたるは、列にも立ちたまはざりけり。

駕輿丁の苦しみは、藤原宮役民の歌にうたわれる民衆の苦しみに通じるものであるが、異なるのは、「なにのこと」となる」と記されるように、それが作者自身のものでもあったという点である。式部の家が、親王宣下の慶祝の列に立たない「藤原ながら門分かれたる」人々の側に属するのは、言うまでもない。翌十月十七日の職司定めにあたつて、「かねても聞かで、ねたきこと多かり」と記すのも同断である。要するに式部は、道長家栄華の記録を期待されつつ、栄華の内実に入り入ることを一切許されなかつたことを発条として、栄華の光に寄り添う影を見据え、それを筆にした。こうした影の部分が、一瞬栄華の光をさらにまばゆいものに見せたことは否めない。

栄華の記事の絵巻を繰取る憂愁の叙述は、十一月十七日の中宮内裏遷啓の記事にも立ち現れてくる。十七日の遷啓の前に「あからさまに」里下がりました式部は、「見どころもなき古里の木立」を見るにつけ、はかないながらも心安らかであった夫没後の生活が、宮仕えに出ることによつてすっかり様変わりして、物語にも感興がわか

ず、親しかった友とも疎遠になつてしまったことを思い、素漠たる孤独感にとらえられてゆく。そうした里居の物思いの中で式部が少し懐かしく思い出すのは、皮肉にも宮中で交じり合う同僚たちであった。そうした心境の変化を「ものはかなきや」ととらえ、

大納言の君の、夜々は、御前にいと近う臥したまひつつ、物語したまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

と、宮仕えに馴れることを拒みつつ、いつしか順応してしまつた己が心の矛盾を鋭く捉え返す眼は、げに冒頭部にあらわれた反転する眼に通じるものであつたと言えよう。大納言の君もまた小少将の君と同様、倫子の姪という家格を誇る彰子後宮の上臈女房であつた。

この後に大納言の君との間で交わされた、

浮き寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛にさへぞおとらぬ

(紫式部)

うちはらふ友なきころのねざめにはつがひし鴛鴦ぞ夜半に恋しき

(大納言の君)

との贈答が、「浮き寝」と「憂き寝」を掛け、宮仕え生活の憂さを共通の心情とすることで成り立っていること、言うまでもない。中宮彰子の宮中への凱旋と道長家の圧倒的勝利を誇るはずの中宮内裏遷啓の記事が、またしても宮仕えの憂さをにじませた贈答によつて繰取られ、記事中の暗部と照応していることに注目しなければならぬ。遷啓後、小少将の君と宮仕え生活のつらさを語り合つたり、

局を訪れる上達部を煩わしく感じるなど、式部の意識はまたしても慶事の外側に出ようとするのである。

細殿の三の口に入りて臥したれば、少少將の君もおはして、なほ、かかる有様の憂きことを語らひつつ、すくみたる衣どもおしやり、厚ごえたる着かさねて、火取に火をかき入れて、身も冷えにけるものの、はしたなさをいふに、侍従の宰相、左の宰相の中將、公信の中將など、つきつきに寄り来つとぶらふも、いとなかなかなり。

皇子誕生後、つきつきに練り広げられた盛大かつ善美を尽くした祝賀の諸行事の中でも、一条天皇の土御門殿行幸と中宮の内裏還啓は、教道親王誕生によつて強固なものとなり、まさにそのこと故に道長政権の磐石を保証することになった、道長家と皇室の強い絆を内外に告示する最高かつ最大の祝儀であつたはずである。そうした祝儀を描く式部の筆がともすれば重いものとなり、自身の憂愁の叙述へと伸びてゆかざるを得ないのは、やはり式部の憂愁が宮仕え生活と分かちがたく結ばれており、主家栄華の記録をなすことが何よりもその事実を紫式部自身につきつけるからであつたらう。主人道長の要請によつて皇子誕生記を主家栄華の記録として執筆することへの心理的抵抗感が、祝賀絵巻に憂愁の縁取りをすることによつて、描かれた栄華から一定の距離を保つという姿勢を式部にとらせたのである。

四、「絵にかきたる」行事

御五十日は霜月の朔日の日。例の、人々のしたててまうのほりつどひたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとよう似てはべりし。
(寛弘五年十一月一日)

若宮御五十日の祝儀に女房たちが着飾つて参集する光景を、紫式部は「絵にかきたる物合の所」によく似ていたと言う。川名淳子氏も指摘される如く、一条朝は歌合および物合が衰微した時代で、紫式部は宮仕え中にこうした催しを實際に体験することはなかったと思われる。が、それ故にこそ、彼女は絵に描かれた往時の物合の様細部まで符合する眼前の光景に、ある種の興奮を禁じ得なかつたのではないか。式部自身の絵画的視点も指摘されるところではある。だが、こうした捉え方は、今まさに眼前で展開される盛儀を式部がいかに筆をふるつて詳細に描き出そうと、行事の全体を行事絵の中に押しやつてしまふ危険性をはらんでいたと言えないであらうか。筆者は第三節ではしなくも「行事絵巻」なる語を用いたが、「絵にかきたる物合の所」が現実の若宮御五十日の行事に引き寄せられ、生き生きとした行事描写を現出するのではなく、若宮御五十日の行事のほうが式部の見たという物合絵の枠の中にはめこまれることにより、現実感を失い、距離感を生じさせるのである。同様のことは、絵が引き合いに出される他の場面にも言えるであらう。

よろづのものくもりなく白き御前に、人の様態、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よき墨絵に、髪どもをおほしたるやうに見ゆ。(寛弘五年九月十二、三日) その日の髪上げうるはしき姿、唐絵ををかしげにかきたるやうなり。

(寛弘五年十月十六日天皇土御門殿行幸の日の内侍二人の姿) うちとけたるをりこそ、まほならぬかたちもうちまじりて見えわかれけれ、心をつくしてつくるひけさうじ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、……、

(同日の女房たちの姿)

それぞれの場面や描く対象によつて、「墨絵」「唐絵」「女絵」と巧みに使い分けるのは、式部の絵画に対する関心の深さのなせる技でもあらうが、絵画的な場面を表現するのに、絵そのものを引き合ひに出すことにより、盛大な行事をあたかも絵画の一場面であるかのように、絵の枠内に後退させてしまった感がなくもない。このこととは、上卿や主家筋の人々への飽くことなき讃嘆のことばを、「絵にかいたような」でしめくくった「枕草子」の場合と比較してみると、自ずから明らかである。

桜の綾の直衣の、いみじう花ぐと、裏のつやなどえもいはずきよらなるに、葡萄染のいとよき指貫、藤の折枝おどろくしく織りみだりて、紅の色うちめなど、か、やくばかりぞ見ゆる。

白き、うす色など下にあまたかさなりたり。せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかうよりみ給へるぞ、まことに絵にかき物語のめでたき事にいひたる、これにこそは、とぞ見えたる。(藤原齊信の描写)

(返しの二月廿余日…の段)

淑景舎は、北にすこしよりて南むきにおはす。紅梅いとあまた、濃く薄くて、上に濃き綾の御衣、すこしあかき小桂、蘇枋の織物、萌黄のわかやかなる、固紋の御衣奉りて、扇をつとさしかくし給へる、いみじう、げにめでたくうつくしと見え給。

(中略)

淑景舎の、いとうつくしげに、絵にかいたるやうにて居させ給へるに、……(淑景舎原子の描写)

(淑景舎、春宮にまゐり給ふ程の事など、…の段) 宮はしろき御衣どもに、紅の唐綾をぞ上にたてまつりたる。御髪のか、らせ給へるなど、絵にかきたるをこそか、ることは見しに、うつ、にはまだしらぬを、夢の心ちぞする。

(中宮定子の描写)(宮にはじめてまゐりたるころ、…の段)

定子、原子、藤原齊信、いずれの場合も詳細かつ具体的にその装束や姿態を賛美した上で、まさしく駄目押し of 賛辞として登場してくのが、「まるで絵にかいたような」であつて、場面描写の一部を墨絵や唐絵、女絵に押し込めてしまった「紫式部日記」の場合と

は、大きくその姿勢を異にする。

じつは、『紫式部日記』にも、特定の人物を画中の人物と見た例が、一例だけあった。

上よりおるる途に、弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、
昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、いろいろの衣に、濃
きがうちめ心となるを上に着て、顔はひき入れて、硯の筥に
まくらして、臥したまへる額つき、いとらうたげになまめか
し。絵にかきたるものの姫君の心地すれば、口おほひを引きや
りて、「物語の女の心地もしたまへるかな」といふに、見あけ
て、「もの狂ほしの御さまや。寝たる人を心なくおどろかすも
のか」とて、すこし起きあがりたまへる顔の、うち赤みたまへ
るなど、こまかにをかしようこそはべりしか。

(寛弘五年八月二十六日)

ここで、宰相の君の昼寝姿に物語の姫君を見出して感動し、思わず荒らかに「口おほひ」を引きのけて声をかけるといふ式部の物狂おしい所作は、物語絵の中に入り込んだような宰相の君を、現実の中の同僚女房として我が手に回復するためのわざだったのではないか。言葉を変えれば、式部にとつての物語絵や行事絵は、それほどに現実から距離を置いたものであった、とすることができよう。

主家栄華の記録をなさねばならなかったが故に、眼前の事実をくいいるように見据え、主家の栄華を証したてる事項を一つ一つ拾い

上げた上で、「見ず」「見えず」の断り書きをせずにはおられなかった式部ではあるが、栄華を賛美する心の隙間に入り込んでくる対象との距離感が、時に行事を克明に描写することに代えて、既成の知識の中の絵に寄りかかった叙述を促したのである。

五、憂愁叙述の意味

前述の如く道長家の栄華を描くことは、同時に栄華から疎外された自身と、自身が日頃心底にかかえもつ孤独感や憂愁を改めて意識させられることに他ならなかった。ただ、そのような思いは、彰子後宮において紫式部一人に抱かれていたのではなく、中宮の母倫子の姫でありながら——ということとは、とりもなおさず彰子の従姉妹でありながら——宮仕えを余儀なくされている小少将の君や大納言の君にも共通するものであったし、『紫式部集』によれば、他の同僚女房にも理解者を持つところのものであったらしい。

弥生ばかりに、宮の弁のおもと、「いつかまゐり

給ふ」など、書きて

憂きことを思ひ乱れて青柳のいとひさしくもなりにけるかな

返し

つれづれとながめふる日は青柳のいと憂き世に乱れてぞふる

寛弘三年十二月末の初出仕後、里下がりして翌年三月にまで至つ

た式部の心中を察しながら、出仕を促してきた中宮女房に、憂き世

の思いを訴えた贈答である。宮の弁のおもとによる出仕のすすめは、中宮彰子の意を体したものであり、そのことは式部も十分心得た上での返歌であろう。宮仕えの憂さに發する式部の憂き世の思いは、同僚女房にも、また主人の中宮彰子にも理解されていたのである。

薬玉おこすとて、

忍びつるねぞあらはるるあやめ草いはぬに朽ちてやみぬべければ
返し

今日はかく引きけるものをあやめ草わがみがくれにぬれわた
つる

おそらくは右の贈答と同じ年の五月五日、薬玉を贈つて出仕を促してきた人も、「忍びつるねぞあらはるる」と、式部にひそかに寄せてきた思いを吐露している。宮仕えの憂さや憂き世の思いは、これらの同僚女房にも確かに共有されてあつたが、小少将の君や大納言の君の場合とは異なり、その表出の仕方はあくまでも控え目であつた。寛弘五年五月五日、土御門殿で中宮彰子の安産を祈願して行われた法華三十講五巻の日の夜から翌暁にかけて、小少将の君や大納言の君と交わした贈答に、「まばゆきまでもうきわが身かな」(大納言の君)「なべて世のうきになかる」(小少将の君)などとあからさまに詠まれていたのとは、明らかに大きな差異がある。これには、やはり中宮彰子の後宮における地位や待遇が大いに関係してい

たとみなくてはなるまい。

小少将の君や大納言の君の憂愁の吐露は、一人とも倫子の姪で、前者は権左少弁源時通女、後者は左大弁源扶義女という家格を誇る上臈女房であつたればこそ、可能であつたとは言えないであろうか。憂世意識を持つことが「ものあはれ」を知る者の証左であり、宮仕えを憂しとする認識も当代の女房たちに共有されてあつたとは言え、そうした意識は主家の慶事や主人の立派さ、素晴らしさの前に霧消するというのが、宮仕え人としてのあるべき心組みというものである。「日記」冒頭部に記される紫式部の意識が、ひともまずそうであつたように。ただ、式部には、主家賛美・主人賛美の姿勢から切り返し、自身の中に抱かれてある憂悶へと回帰する自己凝視の眼差しがあつたし、前掲小少将の君の場合も、大納言の君の場合も、法華三十講五巻の日という道長家の一大盛儀の場で、「憂き身」「憂き世」を慨嘆する姿勢を失わなかつた。

寛弘五年十一月十七日、めでたかるべき中宮内裏還啓にも、小少将の君と紫式部の気持ちは冷え固まっていた。第三節に引いた文の後に続けて、式部は

おのがじし家路と急ぐも、何ばかりの里人ぞはと思ひおくら
る。わが身によせてははべらず、おほかたの世の有様、小少将
の君の、いとあてにをかしげにて、世を憂しと思ひしみてあた
まへるを、見はべるなり。父君よりことはじまりて、人のほど

よりは、幸ひのこよなくおくれたまへるなめりかし。

と、小少将の君の憂世意識の原因を父親が早くに出家した不幸によるものと推測するが、このような物言い自体、並の女房のよくするところのものではなかつたはずである。憂世意識を共有する心の友であり、中宮女房の中でその出自や身分差を越えて対等に付き合える相手と自他ともに認める間柄であつたればこそその言辭であり、中宮女房の中でもその身分に比して別格視されていたらしい紫式部の、中宮後宮における自身の位取りを十二分に意識した文辭であつたと見えよう。

主家や主人の素晴らしさを讃仰するより他のことをなしえなかつた清少納言との、歴然たる差がここにある。それは、ついに主人中宮定子の掌から出られず、否、掌中にあることに随喜した清少納言との対主家における位取りの差であり、彼女たちを擁したそれぞれの後宮の文化の差でもあつた。とすれば、『紫式部日記』の憂愁叙述自体が、『主家榮華の記録』としての『紫式部日記』と『枕草子』の、ひいては御堂関白家と中関白家の勢威の、位取りの差を表わすものと言えないであらうか。第二節でも述べたように、紫式部は、自身の憂愁叙述が主家賛美の大義名分を決して冒すものではないとのひそやかな自信に支えられて、主家榮華の記録の中で自身の鬱憤を解き放つという企みやつてのけたのである。ただ、そのためには、道長から要請された主家榮華の記録を忠実になすとげること、

ならびに、その前提としての主人および主家の全的賛美が是非とも必要であつたし、榮華の全的賛美は『日記』のしめくりにも必須であつた。冒頭部、土御門殿の秋色の美景に始まり、中宮彰子、中宮の父道長、道長の長男頼通へと続く主家の人々の賛美の記事がその前提に当たるとし、日記的部分第二部といわれる寛弘七年正月の記事が、若宮御戴餅の儀に始まり、中宮臨時の客・初子の日の遊び、二宮御五十日と、すべて主家榮華の記に終始、式部の憂愁の叙述を一切排除して『日記』を閉じるのも、一にかかつてこのためである。

冒頭部の主家の人々の賛美の記事に続いては、

かばかりなることの、うち思ひいでらるるもあり、そのをりはをかききことの、過ぎぬれば忘るるもあるは、いかなるぞ。

と、自己韜晦めいたつぶやきが記され、寛弘七年正月十五日、主上の臨席を仰いで二宮御五十日の記事の最後に、右大臣の失策を記して、

いみじきあやまちのいとほしきこそ、見る人の身さへひえはべりしか。

と、いささか感興をそぐような感想を述べるのも、全的賛美ともとれる己が文辭に対する羞恥心の表れと解するべきではなからうか。

かく考えれば、主家榮華の記に己が憂愁を記すことは、表面はなやかさと積極性に欠けるところがあるとす、世間の影子後宮文化

に対する評価と、その中で「源氏物語」作者として果たすべき自身
の役割を十二分にわきまえた上で、作者が自覚的に選び取った行事
記録の方法であったと言いうことができよう。この世の栄華の頂点を
前に、覚醒した眼を持ち続ける人物がいることこそ、何より彰子後
宮文化の奥深さと定子後宮文化に対する優位性を証したてるもので
あり、そのことが可能なのは、紫式部においてはなかったからであ
る。祝賀行事を記すにあたって、晴儀の記録の系譜を継ぎつつ、宮
廷讃歌の流れに沿って、主家への奉仕と主家賛美に寄り添わせる体
で、一女房としての自己の憂愁を叙述する——それは、裏返して言
えば、主家にさまざまな担保を与えた上でしたたかな自己表出の
営為だったのである。

注

- (1) 以下、「日記」と略称する。
 (2) 以下、「紫式部日記」の引用は新編日本古典文学全集による。
 (3) 拙稿「紫式部日記の始発——道長家栄華の記録——」『国文学攷』第56号、
 昭和46・6。
 (4) 以下、「万葉集」の引用は新編日本古典文学全集による。
 (5) 「景としての大宮人」『古代和歌と祝祭』(昭和63、有精堂)所収。
 (6) 「吉野讃歌」神野志隆光・坂本信幸編『セミナー 万葉の歌人と作品』
 第二卷(平成11、和泉書院)所収。
 (7) 土橋寛「古代歌謡と儀礼の研究」(昭和40、岩波書店)三四八〜三四九頁。
 (8) 「藤原宮役民の歌」『万葉和歌史論考』(平成4、笠間書院)所収。

- (9) 拙稿「晴儀の記録の系譜と紫式部日記」『平安文学研究』第49輯、昭和
 47・12。
 (10) 山本利達「紫式部日記 紫式部集」(昭和55、新潮日本古典集成)解説。
 福家利幸「紫式部日記」の憂愁の叙述について——女房日記の生成——
 『国文学研究』第一〇二号、平成2・10。なお、佐藤和喜氏は、苦惱を語
 ることが、場の中に存在する自己の位置から主家を賞賛することになる、
 と説いておられる(「紫式部日記の表現」『宇都宮大学教育学部紀要』第
 39号、平成1・2)。
 (11) 拙稿「晴儀の記録の方法——紫式部日記の若宮誕生記——」『講座 平安
 文学論究』第11輯(平成8、風間書房)所収。
 (12) (13) 「紫式部日記」の絵画的視点——行事記録における俯瞰的觀察の
 表現——『日本文学』第36巻第11号、昭和62・11。
 (14) 引用は新日本古典文学大系による。
 (15) 引用は、南波浩「紫式部集全評釈」(昭和58、笠間書院)による。

——はらだ・あつこ、大阪成蹊大学教授——